

[担当教員]

末包伸吾(教授) 中江研(准教授) 浅井保(助教)

[Teaching Assistant]

秋田湧大(A67) 横田慎一郎(A67) 植田実香(A67)

大学内での活動としての講義や演習・実習とは別に、ある一定の期間、空間を共にし、集中した活動や共通の目的をもって活動する場が求められている。この課題は、近畿圏の大学共通施設として位置づけ、セミナーや共同制作、スタジオ、社会との連携など学内では難しい様々の活動に対して自由で豊かな場を提供することを目的としている。

■計画敷地

計画敷地は、神戸市灘区の山麓市街地に位置する灘丸山公園の土地を想定する。現在の公園用地の全部または一部をセミナーハウス用地として使い、敷地へのアプローチも南側の道路をそのまま利用するものとする。

■建築概要

建築施設の延べ面積は4,000㎡程度とし、階数、構造は自由とする。

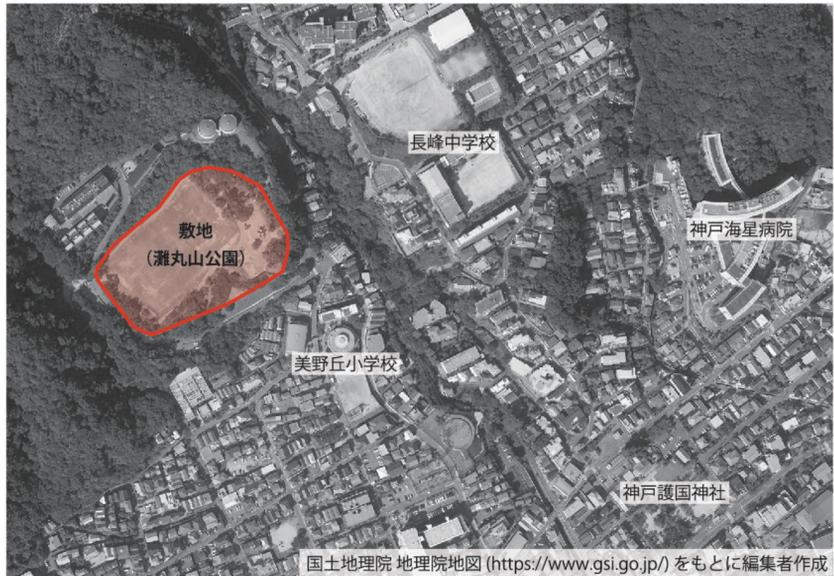
■利用者

施設の利用者は主として大学生、大学院生、大学教員であり、15人単位(10人~20人)が6組宿泊でき、最大で150人の学生が共同で研修できる施設とする。また、指導教員や外来者が別に15人宿泊できる諸室を確保すること。

■提出図面

A1の用紙にコンパクトにまとめること。

- ・全体配置図：scale 1/500
- ・各階平面図、立面図、断面図：scale 1/200
- ・透視図または模型写真



国土地理院 地理院地図 (https://www.gsi.go.jp/) をもとに編集者作成
課題敷地

■講評会の様子



からまる 一まちと大学をつなぐセミナーハウス

柴田貴美子

モラトリアムとも言える大学生の時間は社会から隔離されて同年代の仲間と過ごすだけで良いのだろうか。また大学が、社会に対して「研究機関」という敷居の高い存在になってしまっていないだろうか。この提案では大学と社会のあるべき新しい関係性を追求した。



under Base

藤谷優太

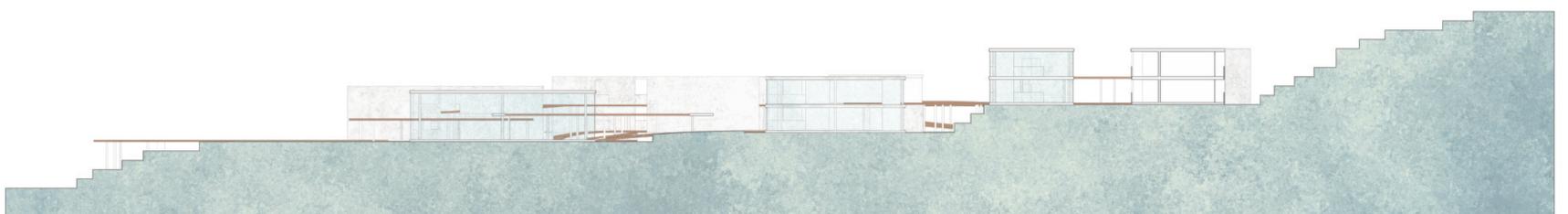
今ある心地の良い公園を残したまま学習という機能を満たすためにボリュームを地下に埋め込んだ。埋め込むために開けたクラックは適切な光量と風環境、動線を創り上げ、降り注ぐ光が印象的な非日常の空間を生む。



環

福原草雅

六甲山と神戸の街の間に位置するこの敷地で「環」状のテラスは各施設を繋ぎ、ここで活動する人々の交流の場となる。「環」は建物や人を繋ぐだけでなく、敷地から飛び出し木々の中に入り込んだり、街を眺める展望台となったりして自然と街をも繋ぐ。



Eye - Pillar

長田遥哉

傾いた柱 (=pillar) が生み出す空間の流れや境界性によってセミナーハウスを構成する。独特な静けさを持つ台風の目 (=Eyewall) とその周りを力強く渦巻く雲の関係性を、研究空間とコミュニティ空間の関係性に落とし込んだ。



05 空間ダイヤグラム



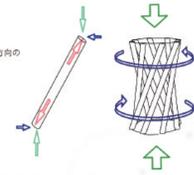
壁ではなく列柱によって空間のあちこちと、こちこちを分ける。はっきりした境界性を持ちながら、空間連続して流れる。

さらに柱に傾きを与えることで空間に動きが生まれやすくなる空間に。

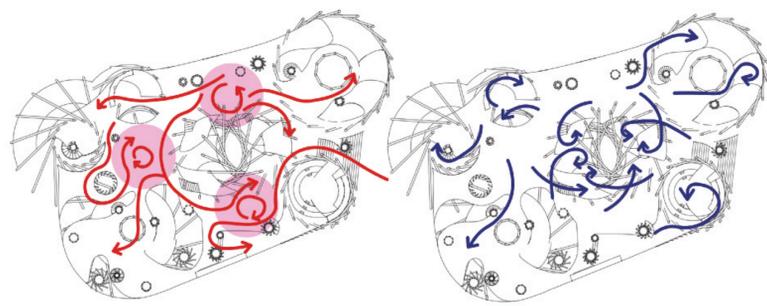


06 構造計画

主構造となる柱は 500mm x 200mm 断面のコンクリート充填鋼のピン支持とする。柱を傾けることによって、コンクリートが負荷する軸方向の力が軸方向だけでなく水平方向にも働き、近年より警戒がされる地震荷重・風荷重に抵抗する(図1)。これらを円周上に配置(コノイド)することで水平方向に傾きなく強度を発揮できる。しかしこの構造体単独では水平荷重がねじりの方向に変換されてしまい構造として成立しない(図2)。そこで、ねじり方向が右回りのコノイドと左回りのコノイドを交互に配置し、打ち消しあうよう計画した。



赤：反時計回り方向のねじり
青：時計回り方向のねじり
五：平面方向の図
右：東方向の図
左：西方向の図



02 コノイド



円柱を円周上に並べて出来るコノイドで空間に内部と外部が生まれる。また、それをねじることで空間の境界性が強くなり、柱の傾きによって外部空間にも渦が生まれる。

04 南側立面図 1:200



1784045T 長田 遥哉

灘の冠

篠山航大

都市の冠のようなこの建築で街の人々からの眼差しを受けることは、ここでの活動に緊張感をもたらし、普段の大学とは異なる活動の拠点となる。そして、多様な屋根の重なりが街の上に浮かんで見える風景は、灘の街の新しいアイデンティティとなるだろう。



灘の冠

「見る / 見られる」セミナーハウス



神戸市南北方向断面図 1/2000

ボリュームを強調するにあたって、神戸市の断面を用いた。所在地からこのセミナーハウスをみることで、その高さに馴染ませる。

